

「課題との出会いと成長への決意～第5回 Motor control 研究会に参加して～」

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科 スポーツ神経科学研究室

修士課程1年 高橋恵一

第5回生理学研究所 Motor Control 研究会が愛知県岡崎市の自然科学研究機構生理学研究所にて開催されました。研究会には、分子レベルから臨床まで、運動制御に焦点を当て研究を行っている研究者が一堂に会しました。そして、研究会参加者は3日間にわたり、特別講演、シンポジウム、一般演題発表、懇親会などを通し、活発な議論と交流を行いました。今年度から運動制御の研究を始めた修士課程1年の私は、様々な分野の方々からお話を伺うことで研究のヒントや刺激を得ることを目的に、本研究会に初めて参加させていただきました。参加前には私の知識不足から、消化不良に終わるのではないかという不安がありました。研究会を終えてみると、やはり自分の勉強不足を実感する場面は多々ありました。しかし、そのことを含め、研究会での一つ一つの出来事が私のなかで貴重な体験となりました。

初日には、第一人者として脳科学研究を牽引されてきた丹治順先生（東北大学）の特別講演が行われました。運動野の理解がどこまで進み、今後の課題がどこにあるのかをとっても分かりやすく講演していただきました。なかでも、連続する複数の運動の実行において、補足運動野がそれぞれの運動の終わりどまりをつなぐ「リンク素子」の役割を担っているというお話に、興味を惹かれました。

2日目と3日目には、研究領域の異なる4つのシンポジウムが開催されました。これらのシンポジウムは、運動制御というものを様々な視点から見ることのできる絶好の機会となりました。私がその中で一番興味をそそられたのは、「非侵襲脳機能計測による運動制御研究の基礎と臨床」と題して行われたシンポジウムです。私は経頭蓋磁気刺激法（TMS）を用いた実験を行っているため、このシンポジウムでの発表は、どれも興味深く感じるものばかりでした。なかでも、私は花島律子先生（東京大学）の研究に興味を惹かれました。花島先生は発表の中で、神経疾患を有する患者さんにTMSを用いた検査を行うことで得られた種々の不随意運動の知見について発表されました。私は普段からTMSを使用していますが、患者さんを対象にすることはないため、一つ一つの報告が新鮮であり、興味深いものでした。

また、1日目と2日目の夜には、それぞれ懇親会およびパーティーが行われました。懇親会およびパーティーでは、シンポジウムや一般演題発表などとは異なり、グラスを片手にリラックスした雰囲気での交流が行われました。私自身もこの懇親会を通じて、多くの方と交流を深め、多くの貴重なお話を伺うことができました。特に1日目の懇親会では、他の規模の大きい学会などでは体験できないような、貴重な体験をすることができました。それは、丹治先生をはじめとする著名な先生方とお話しをする機会が得られたことです。その場では、「アメリカで中古車を買うときには気を付けるように」という懇親会らしいお話

から、「レベルの高いジャーナルを作るにはどうすれば良いのか」「日本の神経科学研究が発展していくためには何が必要か」という高尚なお話まで、様々なお話を伺うことができ、とても充実した時間を過ごすことができました。しかし、ひとつだけ心残りがあります。それは、私の勉強不足のために、一つも学術的な質問をすることができなかったことです。懇親会では、多くの研究者の方が、先生方に学術的な質問をしている姿が見られました。私はその姿を見て、せっかく先生方と長時間お話しする機会が得られたのに、惜しいことをしてしまったと悔やみました。来年こそは研究を進め、そこから生まれた疑問点を先生に質問できるようになりたいと強く思いました。

私は先に述べたように、本研究会での 3 日間で、研究のヒントや刺激を受けただけでなく、自分の力不足を実感させられました。しかし、私は現時点での私の立ち位置を知るという意味で、とても大きな意義を持つ 3 日間だったと感じています。私は日々鍛錬を重ね、来年度の研究会には、一回り成長した姿で参加したいと考えています。